

名誉顧問のコモンセンス

怨望論 1

二宮尊徳と福沢諭吉



「怨望」について

「怨望」(えんぼう)とは、「怨」は怨みで、「望」は遠くから見ることです。この場合、「他人を羨ましく思い、不満や怨みを懐くこと」であり、「嫉妬心」をいいます。いつも、表には現わさず心の中にかくされているので「怨望隠伏」(えんぼういんぷく)ともいいます。身近な人が、自分よりもお金持ちであったり、身分や会社の階級が上であったり、学歴や家柄が上であったり、顔や身体や身だしなみが魅力的であったりすると自らは劣等感を感じて、その人に怨みを懐き、悪口を言い、意地悪をして、なんとか貶(おとし)めようとし、これが「怨望」です。この世で、最も恐ろしいのは「怨望だ」と言ったのは福沢諭吉です。英語では「エンヴァイ」(envy: ねたみ・嫉妬)と「ジェラシー」(jealousy: 成功などに対する嫉妬・恨み)で、悪い意味で使います。"His envy at my success is obvious." (彼が私の成功を妬んでいることは明白だ) や "He couldn't coceal his jealousy from the boy who won." (彼は優勝した少年に対して妬みをかくさなかった)。などと言います。

福沢諭吉の怨望論

さて、その「怨望」ですが、福沢諭吉は、堂々と、その著『学問のすゝめ』で一編をさいて「怨望の人間に害あるを論ず」(第13編)といって、「凡そ人間に不徳の箇条多しと雖(いえど)も、その交際に害あるものは怨望より大なるはなし」と散々に「怨望」を忌み嫌って悪く言いました。

「怨望」は働きの陰(いん: 隠れた)なるものにて、進んで取ることなく、他の有様に由って我(自分)に不平を抱き、我を顧みずして他人に多を求め、その不平を満足せしむるの術は、我を益するに非ずして他人を損ずるに在り。譬(たと)えば他人の事と我の不幸とを比

較して、我に不足するところあれば、我、有様を進めて満足するの法を求めずして、却って他人を不幸に陥れ、他人の有様を下して、もって彼我(ひが)の平均をなさんと欲するが如し。いわゆるこれを憎んでその死を欲するとはこの事なり。故にこの輩(やから)の不幸を満足せしむれば、世上一般の幸福をば損ずるのみにて少しも益するところあるべからず。
【『学問のすゝめ』 岩波文庫 116頁】

「怨望」はあたかも衆意の母の如く、人間の悪事これに由(よ)って生ずべからざるものなし。疑猜(さいぎ)、嫉妬、恐怖、卑怯(ひきょう)の類は、皆、怨望より生ずるものにて、その内形に見(あら)わるところは、私語、密話、内談、秘計、その外形に破裂するところは、徒党、暗殺、一揆、内乱、秋毫(しゅうごう:いささか)も国に益することなくして、禍(わざわい)の全国に波及するに至っては主客共に免かるることを得ず。いわゆる公利の費をもって私を逞(たくま)しうする者と言うべし。怨望の人間交際に害あることかくの如し。【同】

これ以上、悪く言えないほど、悪く言っています。よほど、諭吉翁はだれかから酷い目に遭ったのでしょうか。

今回の「名誉顧問のコモンセンス」では、この「怨望」について、江戸時代末期の日本きっての論客の二人「二宮金次郎と福沢諭吉」の「怨望論」をご紹介しますながら、現在の日本の抱えている問題について考えてみたいと思います。これは、現在の日本人にとって、もっとも緊急の事柄だと思われるからです。

『報徳記』を読む

いま、日本の課題の一つが「農と食」です。そこで、忘れてならないのが二宮尊徳の『報徳記』です。二宮尊徳は、例の薪(たきぎ)を背負って本を読んでいる銅像で、これを「負薪読書像」(ふしんどくしょざう)といいます。お馴染みの二宮金次郎のことです。金次郎の「人は徳に報いるのを善とする」という考えを「報徳思想」といい、報徳先生と呼ばれました。

報徳先生は、江戸時代の終わりに活躍したお役人で、貧乏な村と村人を救うために、農業経済と農村社会を両立させる手法を編み出して、多くの農民と農村と領主を救いました。その報徳先生の活躍を書いた伝記が『報徳記』です。報徳先生の活躍によって、当時の貧しい農民たちや無能のお役人たちや太平楽な藩主たちが生き生きとよみがえる様子は爽快そのものです。現代の「農と食」の貧しさを考えながら、いま、国民が生き生きと生きるためにはどうすべきかを教えてください。いえ、音楽やオペラとは直接関係ありません。でも、心の安らぎと精神の尊厳を感じさせてくれます。音楽とオペラとおなじです。

二宮尊徳の怨望論

このように、諭吉翁と同じく、この「怨望」を人生上の大きな障碍だと感じていた人物が、この江戸時代後期の経世家(けいせいか:混乱している世の中を治める人)二宮尊徳(にのみや・そんとく)でした。尊徳先生の「怨望」についての意見は、先生の業績を述べた『報徳記』で次のように紹介されています。奇(く)しくも報徳先生もまた、諭吉翁に先駆けて、「瘦せ我慢の精神」も「共同体の精神」も、何ごとをなすに付けても共に重要なものだと思っていたのです。そこで、「怨望の悪」も出てきます。

「執政(役人)の任(使命)たるもの、『仁政を行ひ、国の憂患を除き、艱難を救い、衰国をして再び盛んならしむるもの、其の任にあらずや。若し其の任に在(あり)て些(こ)の事を為(な)すこと能はずんば、其の職を貪(むさぼ)る也。何ぞ速やかに退職せざるや』と

云う。是れ、[村人たちの]怨望、止(や)まざる所以(ゆえん)なり」。

【『報徳記』 岩波文庫 164頁】

則ち、村の役に立たないお役人は、「何もしないでお給料をもらっているだけだ」と村人たちから羨(うら)ましがられ嫌われています。「名」(役人としての役目)を捨てて「実」(給料)を取る、実利主義者で、痩せ我慢をしない人たちです。すなわち、村人たちの、この強欲な役人たちと仲間の豪農たちへの「怨望」(焼き餅や嫉妬の念)が、その村を憂いさせ、艱難に陥らせ、ついには衰国(国の滅亡)させる元だと報徳先生はいうのです。諭吉翁は、「徒党・暗殺・一揆・内乱」は村人たちの「怨望」から生まれるといいます。むろん、「怨望」を発する村人たちが悪いのでなく、「執政の任」を果たせない役人たちが悪いのです。報徳先生もまた、諭吉翁同様、「痩せ我慢が出来ない輩(やから)は、速やかに退職せよ」と強い語調でいうはずです。

勤儉と勤勞の報徳先生

独立への切なる思い 小田原藩の家臣二宮尊徳(金次郎)は、元々は貧農の長男でした。5歳のときに暴風で付近を流れる酒匂川が氾濫(はんらん)し、家の田畑も家も流され家計も崩壊してなんにもなくなり、生活に困るようになりました。13歳の時に父親が亡くなると、一家の面倒は金次郎独りで看なければなりません。親類縁者はだれも余裕がなく助けてはくれません。廻りの農民たちはなおさら貧しく自分たちが生きることですばいでした。金次郎独り、朝は早起きして久野山に入って薪をとり、夜は草鞋作りをして、寡婦である母と幼い弟二人の面倒をみました。15歳(享和2年・1802)のとき、貧困の中で母が亡くなり、まだ幼い2人の弟は母の実家に預けられました。金次郎は本家で農業に励み、人から借りたアブラナを堤防に植えてそれで菜種油を取って燈油として、夜、本を読み、また、田植えの際に余って捨てられた苗を用水堀に植えて米一俵の収穫を得ました。このようにしてさらに余耕の五俵を得て、その余耕が二十俵にも増えました。このことが、金次郎の独立心を目覚めさせました。

某年(ぼうねん)出水の為に用水堀流失し堀筋変化し古堀不用の地となるものあり。休日之を開墾し、邑民の棄苗(すてなえ)を拾ひ、集めて植付(うえつけ)しに幸いにして一苞余の実のりを得たり。喜びて曰く「**凡そ小を積(つみ)て大を致すは自然の道なり、是を以て父祖の家を興し祖先の霊を安ぜんこと必せり**」と。僅々たる一苞を種として勤勞し増倍の道を設け年を経るに及て許多の数に満つ。是に於て数年養育の恩を謝し家に帰り家業を興さんことを請ふ。萬兵衛悦びて其の意に任す。然してわずかに虚屋を存すと雖も数年無住の故を以て大破に及び蔓草(つるくさ)軒を蔽へり。先生独り帰り草を払い破損を補理し、独居して日夜家業を励み、**力を尽して有余を生じ、其の田圃を償(つぐな)ふ**。比の如く。**萬苦を尽して**、廃屋漸く煙を挙げるに至れり。 【『報徳記』 21頁】

このように、「萬苦を尽して」、貯めに貯めた米苞(こめつと:米たわら)を以て、二十歳で生家を修復し、質入した田地の一部を買い戻し、田畑を小作に出すなどして旧家を復興したのです。これも、金次郎に、よく働いて儉約をして、貧困に負けまいとする「勤農と勤儉な性格」と、不実な他人を当てにせぬ「独立の精神」があったから出来たことです。また、この「如何にして、利己的なみんなをたよりにしないで独立しようか?」と言う切なる思いが、幼い頃から金次郎に本を読ませたのです。

「二律背反解決」の二人の偉人

包丁の話 また、金次郎はいつも、絶えず、「幸せな人生」について何かを考えている

人でした。まさに寸暇を惜しまぬ思考の人でした。料理をするときに包丁を持って茄子や大根を切っていますが、手は動いていますが、頭はなにもしていません。その時に、手に持っていた包丁をジーッと見つめながら、金次郎はなにもしない頭を働かせました。「禍・福もお互いに両立せず、相対する二律背反だ。だがこの矛盾も解ける」と金次郎は考えました。

禍・福は二つあるわけではない。元来一つのものだ。近いもので譬えれば、包丁（ほうちょう）で茄子を切り大根を切るときは幸いである。若し、指を切るときには禍（わざわい）である。ただ柄（え）を持って物を切るのと誤って指を切るのとの違いだけだ。柄だけあって刃がなければ庖丁ではない。刃があって柄がなければ用に立たない。柄があり刃があって庖丁となる。柄があり刃があるのは庖丁の常だ。しかも指を切るときは禍とし、菜を切るときは福とする。[禍福は表裏一体だ] だから **禍・福というのも私物** [いつも自分の手のなかにある自分のもの] **である**。水もまた同じだ。畔（あぜ）を立てて引けば田地を肥やして福となり、畔がなくて引けば肥えた土が流れて田地が痩せ、禍となることは限りがない。ただ畔があるのとないのとの違いだけだ。もと同一の水でありながら、畔があれば福となり、畔がなければ禍となる。富は人の欲するところであるが、己のためにするときには禍がそれにしたがう。世のためにするときには福がこれにしたがう。財宝もまた同様だ。**蓄えて施（ほどこ）せば福となり、蓄えて出さなければ禍となる**。これは知っていなければならない道理だ。

【『二宮翁夜話』24頁】

絶対矛盾の二律背反 これも大切な教えです。この「禍・福は二つに分かれているものではない。元々は一つなのだ」という考えは、ハイデッガーの現象学や道元の禅道の理念にも通じます — 「そのもののなかに、矛盾も、本質も、同時にある」。「二律背反」する物事に対する素晴らしい洞察力です。金次郎は、「生きていくために、薪も取らなければならない、本も読まなければならない。どちらかを選べば、どちらかできない」という生活上の死活問題に悩みます。そこで考えたのが薪を担ぎながら本を読むという「負薪読書」でした。見事に二律背反の難問を解いたのです — 「勤労の中に勤勉もある。勤勉の中に勤労もある」。金次郎は、これからもどんどん、こういった生活上の「二律背反」の難題にぶつかります。それを、次から次へと解いていき、世の為に人の為に尽くすのです。この「金次郎二律背反解決名人」については、この「天道か、人道か」をはじめとして、また、「富か、貧か」「奇策か、熟慮か」「棄村じゃ、帰村か」「忠か、孝か」「飢餓か、救荒か」などを、「二律背反論」として改めて別項でまとめて論じることになります。

禍・福の背反 報徳先生は、包丁には危険な刃が付いているが、安全な柄も付いている。なにごとにも、危険と安全が、すなわち、幸と不幸という相反するものが表裏一体となっていて、「この幸も不幸も自分だけが持っていて、幸の使い方を間違えると不幸になって現れる」というのです。自分一人で大きな桃を枝からとって食べようとすると、慌てて、柄と間違えて刃の方を持ってしまうのです。危ない、危ない。なにごとにも蓄えて施せば福となり、蓄えて出さなければ禍となる。これも「報徳仕法」（人生の正しい生き方）の一つで、美味しいものはみんなで分け合って食べましょう。

変通（権道・裏技）の事 草取りと怨望の人

実行可能な裏技 いつも直情径行な先生ですが、どうしてもない面倒があれば、それを避けて、仕事を順調に進めるための「権道・裏技」も教えてくれます。これを「**変通**」（へんつう:臨機応変の処置）といいます。これも、先生の熟慮と経験から生まれた現実的な知恵でしょう。それになによりも、現在困っている人たちに、具体的で効果のある「裏技」を密かに教えるだけの親切心が指導者にあることが重要です。指導者は、決して、理論一徹で、猪突猛進な頑固な道学者であってはなりません。裏技を用いるのも、実際に当事者

で在り、施政者で在り、教育者である者の責任の発露です。「変通」は、リーダーにとって現実的で有効な手段です。

翁はこう言われた — 「何事にも **変通** ということがある。知っておかなくてはならない。これは言いかえれば「権道」（げんどう：手段は正しくないが、目的は正しい道にかなうこと。目的をとげるために執る便宜の不正な手段・臨機応変の手段）だ。困難なことを先にするのが聖人の教えであるけれども、これはまず仕事を先にして、あとで賃金を取れというような教えである。たとえば、農家に病人などがあって、耕作や草取りに手おくれになったときに、草の多い所から先に取りるのは世間の常のやりかたであるが、そういうときには[逆に]、草が少なくて、やりやすい畑から手入れをして、**草がもっとも多い所は最後にする**。これがもっとも大切なことだ」。

【『二宮翁夜話』24頁】

もっとも草が多くて手重（ておも）な所を先にすれば、大いに手間どって、その間に草の少ない畑もみな一面の草になって、どれも手おくれになるから、草が多くて手重な畑は、五畝（せ）や八畝は荒れたままでよいと覚悟をして、しばらく捨ておいて、草が少なく手軽な所より片づける。そうしないで手重な所にかかり時日を費やせば、わずかな畝歩（せぶ）のために、総体の田畑が順々に手入れがおくられて非常な損になる。国家を復興するのもまたこの理屈である。知っておかなくてはならない。

また山林を開拓するには、大きな木の根はそのままに差し置いて、まわりを切り開くがよい。そして三、四年たてば、木の根は自然に朽ちて、力を入れないで取れるものだ。これを開拓のとき一時に掘り取ろうとするときは、**労が多くて功が少ない**。万事がそうだ。村里を復興しようとするれば、**必ず反抗する者がある**。これを扱うのもまたこの理屈だ。**決してかかわってはならぬ**。気にせずにおいて自らの勤めを励むべきだ。

「簡単なものから、先ず、始める」 — この裏技はだれでも実行可能です。入試問題も、解けるものから解いていきましょう。これはまた、「怨望」ある人に出会ったときには、「決してかかわってはなりません」という教えでもあります。一度は避けて通りましょう。

金次郎は、なぜ、本を読んだのか？ 理由は二つ

金次郎は、幼い頃に、一家を支えるために、山で集めた枯れた木々を町に出て売って歩きました。その行き帰りに歩きながら本を読みました。また、みんなが寝たあと、独り隠れて本を読みました。貧しい農民の息子であった金次郎は、なぜ、そんなにまでして難しい儒教の道徳的な本を読んだのでしょうか？

理由は二つあります —

人間とはなにか — 一つは、困っている貧しい金次郎一家を誰も助けようとしません。なぜ、そんなに「人」は薄情なのでしょう？ 独善的で、利己的 — それが本来の「人」のありかたなのでしょう？ **「人間とはなにか？」「人生とはなにか？」** — その疑問を解くための読書でした。金次郎は、自分を雁字搦（がんじがら）めになっている廻りの困難・困苦から「自由になりたかった」のです。いまの孤独で非人情な境遇から離れて、自分が良いと思うような、人間らしい、生き甲斐のある **「独立した自由な人生を送りたかった」** のです。でも、その理想の人生をどう「言葉」にして言っても良いか分かりません。また、その理想を実現するのにどうしたいのかも分かりません。それを知るために、中国の優れた賢人たちの本を読んで学ぼうとしたのです。

貧民の救窮 — もう一つの理由は、貧しい村を豊かにして、廻りの不幸な農民たちを幸せ

にしたかったからです。それならば、四書五経を読むのではなく、農業や農作業の本を読むべきです。でも、金次郎は、そうはしません。村の貧困の原因は二つ — 「自然の脅威」と「欲張り施政者の圧政」だと知っていたからです。この二つに立ち向かうには、一人ではなく、農民こそでの勤動しかありません。これは、農業改革を行った佐藤深淵とは違うものでした。農村の繁栄は、農業のやり方にあるのではなく、農民の勤労にあるのです。これは、全農民が一緒になって共に働くことです。すなわち、報徳先生が望んだ「共同体」のことです。これはまた、諭吉翁が求める「立国」の望ましい姿です。

しかし、ふしぎに彼[二宮尊徳]は、農業の新しい方法を生み出したのではない。或いは広い経験というものに立脚して、農業経営をうち立てたのでもない。そうしたことからいうならば、彼が六十四歳のとき、八十歳で亡くなった佐藤信淵の方がはるかにすぐれている。信淵は、尊徳のように経験にだけ頼った人ではない。彼は精密に土壌を分析して、四十八等もの土質を調べあげ、また厳密な方法で気候の変化を農事に関連して調査した。そしてあらゆる草木・土石というものに、その性質を実験的に試している。信淵は、その上に立って農業を指導したのだ。彼の書いた『経済要録』などは、とうてい尊徳などのおよびもつかない知識が展開されている。【『二宮尊徳』奈良本辰也著・岩波新書151頁】

核になるもの 当然のことです。報徳先生は、農村の疲弊の原因は、佐藤信淵のように「農業経営や土壌や気候にある」とは思っていなかったのです。先生は、農村を困窮から救うのは、「農業」ではなく、「農民」だと思っていました。問題は、担当役人や村長や村人たちの間に、共同体を作る上で必要な何か「核」になるものが欠けているのです。自分たちの村を廃村から救うには農民たちが結束して勤労に働くしかないと覚悟を決めたのですが、その共同体の中心の「核」になるものとその「名前＝名称」が分かりません。信淵のように農業書を読んで土壌の分析や気候の変化を学びそれを実行するよりも、「身体壮健な者は、昼は出て日雇い賃を取り、夜は縄をない、沓・草履を作るように努力する組織」の方が大事なのです。でも、その中心となる「核」のことをなんとなく良いか分かりません。その言葉がないと共同体を一つにまとめることができません。

「仁」の発見

「仁」の入ったガラス瓶 先生は、やっとその答えを、四書五経で学んだ「五常」の中に見つけました。「仁」です。「仁・義・礼・智・信」の五つの徳目の中の最初に出てくる「仁」です。孔子も、「仁をもって最高の道徳である」というだけで、「仁」とはなんであるかを具体的に論じたことはありません。結局、中国の古典や儒教に詳しくない金次郎には、「仁」とはなんであるのかよく分かりません。そこで金次郎は、覚悟しました。なんだから反対のようですが、**核になる言葉さえ見つければ、その意味や解釈や概念などは後から当てはめればよい**とおもったのです。すなわち、「仁」はなんであるかを問うよりも、自分がこれは「仁である」と思ったものを「仁」にすればいいのです。そこで、「仁」とラベルを貼った空のガラス瓶を小脇に抱えて、「これが仁だ」と決めたものを、なんでもかんでも、次から次へと捕まえては瓶の中へ放り込めばいいのです。それがすべて「仁」となるのです。報徳先生は、まず、「村民を困窮に陥れているのは何か」を探ります。それが見つかり、それを除く方法を見つけて、それを村人に施します。それが、「仁」です。すべてが、弱っている農民を健康にするのが役目です。先生は、学者ではありません。善政を敷く政治家です。病気を治すお医者さんです。「一国はなお一人の身体のごとくにして、学者と政治家と相ともにこれを守り、政治家は病に当りて治療に力を用い、学者は平生の摂生法を授くる者のごとし」【『学問の独立』】と諭吉翁が言ったとおりです。

報徳先生が、ある行為が、「人を思いやること」であり、「仁とは自分よりも相手を先にすること」であり、それから感動を受ければ、それを「仁」といえばいいのです。「仁」は、

「平和」や「正義」や「道徳」や「自由・平等・博愛」や「所得倍増」や「移民難民歓迎」など、色々な内容であっても良いのです。それが、反対に、「移民規制」や「学歴社会」や「人種差別」や「独裁制」といった一般社会の公共道徳に反するものでなければいいのです。「仁」、それはすべての良い物を包摂した唯一の言葉だ — そう、報徳先生は思ったのです。

働く農民たちの組織である「農村」は、この「仁：自分より相手を先にすること」によってまとまります。全員が、「自分が一番でなくてもいい」という「痩せ我慢の精神」で暮らすことです。これこそ、報徳先生が『四書五経』を読み、そこから学んだ「仁の心」でした。『大学』に、「一家・仁なれば、一国・仁に興り、一家・譲(ゆず)りあれば、一国・譲りに興る」とあります。農民たちが精業につけば一家は「仁」になります。一家が「仁」になれば藩も「仁」になります。一家が「譲」になれば、藩も「譲」になります。これが、「真の共同体」です。

それで、報徳先生によれば、「仁」による政治とは次のようなものを言います —

①厚く「仁」(思いやり・親愛の情・食物を与える・賞賛するなど)を施し、②其の艱苦を去て安楽に導き、③大いに恩澤(おんたく:人や物に利益や幸いをもたらすこと)を布(し)きて、④其の無頼の人情を改め、⑤専ら土地の貴き所以を教へ、⑥力を田圃に盡くさしむるにあり。

これで、村に、「仁」を核とする「仁政」が布(し)かけられました。ここに、お互いを大切にする「働く共同体」が誕生したのです。

これ〔仁政を布くこと〕は、① **救窮の良法** であるばかりではなく、② **勸業の良法** でもある。この法を実施すれば、③一時の窮乏を救うだけではなく、④遊惰の者をも自然に勉強させ、⑤思わず知らず職業を習い覚えさせ、⑥習性となつて、⑦弱い者も強者となり、⑧愚者も職業に慣れ、⑨幼者も縄をなうことや⑩草鞋を作ることを覚え、⑪そのほか種々の稼ぎを覚えて、⑫懐手をして遊んで無駄食いをしている者もなくなり、⑬人々は遊んで暮らすことを恥じ、⑭無駄食いをしていること恥じて、⑮それぞれ精業につくようになるものだ。【『二宮翁夜話』第百九十二話・177頁】

助ける側に廻る 曾(か)つては、金次郎たち困窮する農民を助けようとするお役人自身が、怨望に満ち満ちていました —

①数年の困苦に迫り、②頗(すこぶ)る仁義の道を失ひ、③自ら功を立てんことを好み、④人の功を妨げ、⑤他の善を忌(うら)むの心盛んにして、⑥国家の為に私心を去り、⑦忠を憑(つ)くさんとするもの鮮(すくな)し。

— というありさまでした。そこで先生は、「困っている自分や家族、また、困っている農民たちを助けるには、助ける側に廻って、お役人ならどうすれば良いかを考えることだ」と思い至ったのです。そこで、遂に、中国古典の「四書五経」のなかから「仁」と言う言葉とその意味をみつけたのです。すなわち、「弱い者の身方になる」「弱い者に対する助ける側の立場に立つ」の二つが「仁」なのです。

仁政を施せ 興廃している村落に対しては、困窮している農民たちに「仁政」を布くことに尽きます。先生は、常に藩の役人や村長(むらおき)たち指導者には、村民に「恩澤」を施すよう厳しく説いて廻りました。

曰わく — ①「君、仁にして臣忠あり」であり、②「執政の任たるもの、仁政を行ひ、国の憂患を除き、艱難を救い、衰国をして再び盛んならしむるもの、其の任にあらずや」であり、③「再復の事を考るに、土地瘠薄(せきはく:枯れていて)にして人民の無頼・怠惰も亦(また)極(きわま)る。然りと雖(いえど)も之を振起するに仁術を以てし、邑民が旧染(きゅうぜん)の汚俗を革(あらた)め専ら農事に盡(つく)す時は再興の道なきにあらず。而して仁政行れざる時は、仮令(たとえ)、年々四千石の貢税を免(ゆる)すといへども彼らの貧困は免ることあるべからず」であり、④「執政の任たるもの、仁政を行ひ、国の憂患を除き、艱難を救い、衰国をして再び盛んならしむるもの、其の任にあらずや」であり、⑤「故に衰国を起し富優に復さんとする時は必ず先づ仁政を施し、下民の艱難を救ひ、其の疾苦を除き、其の生養を安するに在り」です。

などなど、素晴らしい教えばかりです。この際、一つ一つの項目をゆっくり読んでみましょう。このほか、多々、先生の具体的な「仁政」や「仁術」に基づく優れた言動は枚挙にいとまがありません。役人たちがこれらの教えを達成するまでは、先生も手を緩めなかったことでしょう。

仁の心とは 困窮する農民を救うには、救う方が、このように「仁の心」をもってすれば良いのです。そして、人を救う「仁の心」こそが「本来の人の在り方だ」と知ったのです。金次郎が悟った「仁の心」は、**「先ずはじめに、人の為に尽くす」**とすることなのです。これによって、「あいつより、俺だ!」という「怨望」の疑問は一度に解消しました。

「私は若いころ初めて家を持ったとき、一枚の鋤(くわ)がこわれた。隣家へ行って、「鋤を貸してください」と言ったところが、隣家の老人は、「いまこの畑を耕して菜を蒔こうとしているところだ。蒔きおえるまで貸すわけにはいかない」と言う。自分の家に帰ったところが別に仕事もない。私は、「ではこの畑を耕してあげましょう」と言って耕し、「菜の種を出してください。ついでに蒔いてあげましょう」と言って、耕したうえに種を蒔いて、そのあとで鋤を借りた。そのとき隣家の老人は、「鋤だけでなく、何でも困ることがあったら遠慮なく申し出なさい。きっと用だてましょう」と言ってくれたことがある。こういうふうになれば、何事もさしつかえのないものだ。おまえが国に帰って新しく一家を持ったなら、必ずこのことを心得ておきなさい」

【『二宮翁夜話』 17頁】

いい話ですね。これは、金次郎が、「人生に於いて最も大事なものは仁の心であり、それは、先ずはじめに人の為に尽くすことだ」と覚悟を決めたことを知るにもっともふさわしいお話です。あとでまた述べる「取ると施す」の時にもこの「仁」のやり方が効を奏します。

学問は活用を尊ぶ

勤勉の報徳先生：「里は仁をよしとする」 金次郎が薪を背負いながら読んだのは、漢籍の「四書五経」の内の『大学』でした。先生の言動の中に絶えず「四書五経」が出てくるのは、金次郎が如何にこれらの多くの本を精読し、そのなかから「仁」と「智」の二語を大切にし、またその内容を実際に活用したからです。例えば、二宮翁と呼ばれるように

なってからの逸話のなかに「里は仁をよしとする」というのがあります。

翁はこう言われた — 「**学問は活用を尊ぶ。万巻の書を読むといっても、活用しなければ用をなさない。**『論語』(里仁篇)に「里(さと:村)は仁をよしとす。撰んで仁に居らずんば、いずくんぞ智を得ん」(村は仁に厚い気風の村がよい。住む場所を選ぶのに、仁の村を選ばない人は、とても智者とはいえない)とある。まことに名言である。そうはいっても、各地を遊歴する人や借家人などならば、仁の村を選んで住むこともできよう。しかし田畑・山林・家蔵などを所有している、何村の何某といわれる者は、どんな仁義の村があったとて、その村に引っ越すことができようか。だからといって、その不仁の村に不快に思いながら住んでいては智者といわれないことはもちろんだ」。

【『二宮翁夜話』以下37頁以降】

「さて、決然と不仁の村を捨てて仁義の村に引っ越す者があっても私はこれを智者とはいわない。**書を読んで活用を知らない愚者だ。**なぜなら、何村の何某といわれるほどの者が全戸を他村に引き移すことは容易ではない。その費用も莫大であろう。この莫大な費用を使い、住みなれた故郷を捨てるのは、もっともおろかなことだ」。

「書を読めば、それを活用しなさい」とおなじことを諭吉翁も言っています。

学問はただ読書の一科に非ずとのことは、既に人の知るところ生れば今これを論弁するに及ばず。**学問の要は活用にある。**活用なき学問は無学に等し。【『学問のすゝめ』106頁】

諭吉翁は、さらにいいます

書を読まざるべからず、書を著わさざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かいて言を述べざるべからず、この諸件の術を用い尽してはじめて学問を勉強する人と言うべし。すなわち視察、推究、読書はもって智見を集め、談話はもって智見を交易し、著書、演説はもって智見を談ずる術なり。【同】

諭吉翁は、さらにいいます

然りしてこうしてこの諸術のうちに、あるいは一人の私をもって能くすべきものありといえども、**談話と演説**とに至りては必ずしも人とともせざるを得ず。演説会の要用なることをもって知るべきなり。【同】

諭吉翁は、最後に締めていいます

方今我國民において最も憂うべきは、その見識の賤(いや)しき事なり。これを導きて高尚の域に進めんとするは、固より今の学者の職分なれば、苟(いやしく)もその方便あるを知らば力を尽してこれに従事せざるべからず。然るに **学問の道において談話・演説の大切なるは既に明白**にして、今日これを実に行う者なきは何ぞや。学者の懶惰(らんだ)と言うべし。人間の事には内外両様の別ありて、両つながらこれを勉めざるべからず。今の学者は内の一方に身を委(まか)して外の務めを知らざる者多し。これを思わざるべからず。私(わたくし)に沈探なるは淵の如く、人に接して活発なるは飛鳥の如く、その密なるや内なきが如く、その豪大なるや外なきが如くして、始めて真の学者と称すべきなり。【同】

おやおや、諭吉翁はここでも、自論の「談話と演説の重要性」を説きたかったのです。諭吉翁は活動の人です。共同体を重視する人です。学者も教室で、いわゆる「講壇学者」「講壇哲学」として学生相手に突っ立って学問を説くのではなく、広く世間に出て街の角々に立ち、辻説法や辻演者となり、手を振り、足を鳴らして、自論を展開して、一般市民を奮

起すべきだということです。これが真の学者であり、真の学問であるとするのです。

談話と演説は必要 でも、なぜ、そんなに諭吉翁は、「談話と演説」にこだわったのでしょうか？ それは、目的が一般大衆(すなわち、国民)の啓蒙にあるからです。鎖国から自由になったばかりの日本にあっては、現在、外国との活潑な交際の刺衝に堪え得ないからです。その原因は、無辜(むこ:何の罪もない)で、世界の事情に不明な国民の「独立心の低い意識」にあります。また返って、相手を「怨望」する者まで出てくるかも知れません。

洋商の向かうところアジアに敵なし。恐れざるべからず。もしこの勁敵(けいてき:強敵)を恐れて兼ねてまたその国の文明を慕(した)うことあらば、よく、内外の有様を比較して勉むるところなかるべし。
【『学問のすゝめ』113頁】

法の権も商の権も日に外人に犯され、遂には如何ともすべからざるの場合に可至哉(いたるべしなり)と。学者終身の息は唯この一事のみ。政府の官員愚なるに非ず、又不探切なるに非ず。唯如何ともすべからざるの事情あるなり。其事情とは、**天下の民心即是なり**。民心の改革は政府独りの任にあらず。恰も **智見を有する者【学者】はその任を分て自から担当せざるべからず**。結局我輩の目的は我邦のナショナリチを保護するの赤心のみ。

一般国民の広い啓蒙が、当時の学者の任務なのです。それで、諭吉翁も一般庶民を相手に『学問のすゝめ』を延々と書いたのです。日本国民に希望と信頼をおいていました。ここが諭吉翁の偉いところです。決して「衆愚」は認めませんでした。そこで、西洋諸国の人民を例にとり、説いて聞かせます。

西洋諸国の人民、必ずしも智者のみにあらず。然るにその仲間を結びて事を行い、世間の実跡に顕わるる所を見れば、智者の所為に似たるもの多し。国内の事務、悉皆、仲間の申合せにあらずはなし。政府も仲間の申合せにて議事院なるものあり。商売も仲間の組合にてコンペニなるものあり。学者に仲間あり、寺にも仲間あり。僻遠の村落に至るまでも、小民各々仲間を結て公私の事務を相談するの風なり。既に仲間を分かてばその仲間毎に各固有の議論なきを得ず。
【『文明論之概略』114頁】

諭吉翁は、結束した日本国民の「共同体の精神」を信じていたのです。「日本は、決して愚民の集まりではない」 — 周りの仲間を信頼するヒューマニスト諭吉翁の面目躍如たるところです。

今一国の衆論も、その定りたる上にてこれを見れば、頗る高尚にして有力なれども、その然る由縁は、高尚にして有力なる人物の唱えたるが故のみを以て議論の盛なるにあらず。この議論に雷同する **仲間の組合** 宜しきを得て、仲間一般の内に於て自から議論の勇気を生じたるものなり。概していえば、西洋諸国に行わるる衆論は、その国人各個の才智よりも更に高尚にして、その人は人物に不似合なる説を唱え不似合なる事を行う者というべし。

右の如く西洋の人は、智恵に不似合なる銘説を唱て、不似合なる巧を行う者なり。東洋人は、智恵に不似合なる愚説を吐きて、不似合なる拙を尽す者なり。今その然る所以の源因を尋るに、ただ **習慣** の二字にあるのみ。習慣久しきに至れば第二の天然と為り、識らず知らずして事を成すべし。

議論という新しい習慣 諭吉翁は、国民間にてこの議論を行い、それに賛同する共同体の「新しい習慣」を日本国民の間に作ろうとしているのです。これが、「学問のすゝめ」と「文明論之概略」を書いて広く流布させた目的であるのです。

智者になれ 一方、報徳先生もまた、「書を読んで仁を学び、その仁を活用してこれ行

い、智者になれ」といいます。「智者になるには、決まった方法がある。これを『道』と言おう」ともいいます。

人には道があり、道は野蛮な国でも行なわれるものだから、どんな不仁の村里といっても、道が行なわれないということはない。自らこの道を行なって、**不仁の村を仁義の村にして先祖代々のその所に永住することこそ「智」というべきだ**。こうでなければ、けっして智者とはいえない。

報徳先生は、「不仁の村」を「仁の村」にするには「智恵」が必要だと言います。

さて、その不仁の村[野蛮な国]を仁義の村にするのは、それほどむつかしくはない。まず自分で道を踏んで、**自分の家を仁にすること**だ。自分の家が仁にならずに村里を仁にしようとするのは、白砂を炊いて飯にすることと同じだ。自分の家が真実に仁になれば、村里が仁にならないことはない。古語(『大学』)にもある。「一家仁なれば一国・仁に興り、一家讓(じょう)あれば一国讓(ゆず)りに興る」(一家に仁の道が実現されれば国全体も仁に興る。一家に謙讓の徳が実現されれば、国全体も謙讓の徳が盛んになる)と。

また、先生はこうも言っています —

「まことに仁に志せば悪なし」(心から仁を志向すれば悪はなくなる)と。このとおり、けっして疑いのないものだ。ここに竹・木など本末(もとすえ)が入り交り、豎横(たてよこ)に入り乱れているのを、一本ずつ本(もと)を本とし、末(すえ)を末にして終りまでやれば、ついには本末(ほんまつ)がそろって整然となるようなものだ。古語(『論語』顔淵篇)に「直(ちよく)を挙げて諸々の曲がれるを措(お)くときは、よく曲がれる者をして直からしむ」(正直者を引き立て、不正直者を捨てて用いなければ、不正直者を正直者にする事ができる)とあるとおり、**善人や正直者を挙げて、たえず厚く賞誉する** ならば、必ず四、五年を経ないで整然とした仁義の村となることは疑いない。 【『二宮翁夜話』第三十九話 38頁】

世間の富者は、この原理がわからず、①書を読んでも活用することを知らず、②わが家を仁義にすることを知らず、③いたずらに迷って、④村里の不仁なのをにくみ、⑤村民は義を知らず、⑥人氣が悪く、⑦風儀が悪いと罵って、⑧他方に移ろうとする者が往々ある。これは⑨おろかというべきだ。

智の実践の書 素晴らしい言葉です。この原理こそ「道」です。「方法」です。「智恵」です。報徳先生流に言えば、「仕法」です、ここで、長じて翁になった金次郎は、「本を読んだからこそ、知るものがあるのだ」と論じています。まず、「仁」という言葉を知り、その「仁」がなんであるかを知りました。金次郎は、ただ、本を読んで、そこに書かれていることを知るだけではありません。そこに書かれていることは、「一体、何のことなのか」とその実体を学ぶこととしたのです。「**学問は活用を尊ぶ**。万巻の書を読むといっても、活用しなければ用をなさない」と言い、「書を読んで活用を知らない者は愚者だ」というのです。例えば、「仁」というものの存在を知って、それが実際にどんなモノであり、**「仁の実体は、その働きにある」**ということを知ったのです。「奇跡が素晴らしいのは、それが実際に起きるからだ」といったのはイギリスの作家G.K.チェスタトンですが、「仁が素晴らしいのは、それを実際に行えるからだ」といったのは報徳先生です。これが、本来の「読書の活用」であり「学問の活用」というものです。そして、この『報徳記』こそ、読書と思索によって「智を実践」した成功物語の集成だとも言えます。それで、読んでいて面白いのです。実行しましょう。

怨望なき賞賛の村

村人の投票で賞賛 ここで、注意しておきたいのは、報徳先生は、村を復興させるには、出来高や開墾で農作物の生産を高めるだけでなく、先ずなによりも最初に、人心がバラバラの怠惰な寒村を「仁義の村」にすることが大事だと言っていることです。「農より農民」「米粟(穀物)より仁」です。そのためには、「善人や正直者を挙げて、たえず厚く賞賛する」ことだということです。それは、村人たちが自ら投票して、勤労で、善人で、誠実な仲間を選び表彰するのです。これは、いままでにない村人たちの「意志の発出」です。この「他人を賞賛する」ことは、相手を敵対視する「怨望」とは反対の行為です。このように農民同士でお互いを羨(うらや)むでもなく、嫉妬するでもなく、農村で、農民同志が、相手を誉め讃え、尊敬し、それを手本としようとするのです。これが自然に行われるのが農村社会です。なぜなら、農作業にはお互いが助けあう「共同作業」が多いからです。独りの力や、一家の力では、とても固い農地や広い農地の開拓や耕作はできません。また、田植えや刈り取りなどの一時に集中する時期的な作業は、多くの手が一度に要ります。村人同士お互いに助け合って、補い合いながら作業をせざるを得ないのです。その共同作業のなかから、一目置かれる優れたリーダーが自然に生まれます。毎日の作業にあっては、お体裁や見せかけや口先だけでは尊敬は集められません。仲間が一番知っています。その人を尊敬し、感謝を捧げたくて、誉め讃え表彰するのです。「怨望」とは反対の行為です。

怨望撲滅の第一歩 共通のお手本を決めるこのリーダー選びで、はっきりした具体的な目標が定まります。村人全員の「あるべき村民」の理想像が決まれば、自分たちが自主的に村の在り方を決めることができます。これこそ、自分たちで、自分たちの望む村を作る第一歩です。「村」より「村民」です。そのために自分たちになるべき「理想の農民の姿」を自分たちで選んで決めるのです。「自分たちが作る自分たちの理想の村」という意識が、ここで初めて生まれました。ここからは、財ある立派な村作りよりも、「仁」ある村民となることなので、「怨望」は生まれません。これこそ、農村における怨望撲滅の第一歩です。

先生は、ほかの箇所でも更に詳しく、次のようにいっています —

村里の興復 翁はこう言われた、「村里の復興は正しい人を挙げるにある。土地の開拓はよく肥えた土地を挙げるにある。ところが、善人はとかく退いて引きこもる癖のあるものだ。つとめて引き出さなければ出ない。よく肥えた土地は必ず低いくぼんだ所にあつて、掘り出さなければあらわれないものだ。これに心づかずに開拓場をならしてしまえば、肥えた土地はみな土中にうずまって永久にあらわれない。【『二宮翁夜話』44頁】

村里の損失はこれ以上のことはない。村里を復興するのもまた同じ理屈だ。善人を挙げて隠れないように勤めるべきだ。また土地の改良をしたければ、肥えた土を掘り出して田畑に入れるがよい。それと同じに、**村里の復興は、善人を挙げ、精を出す人を賞賛すること**にある。これを賞賛するには、投票で、耕作に精を出して品行がよく心がけのよい者を選び、無利息金の巡回貸付法を行なうがよい。この法は、たとえば米を臼(うす)でつくようなものだ。杵はただ臼のまん中をつくだけだが、臼の中の米は同一に白米になるのと同じ道理で、返済さえ滞らなければ、社中一同が知らず知らずに自然と富貴になろう。【同】

理想の社会「仁者の共同体」の実現 村を再興するのに、低いくぼんだ所にあるよく肥えた土地を起こして利用するように、自らは名乗り出ない優れた農民を村人たちに選ばせて、表彰して、みんなのお手本にすることが肝心です。ここに、村人の自主性を感じます。「怨望」とは全く無縁の働きです。彼らはもう、生産者としての単なる農民ではありません。農村という社会で暮らす勤労者は、恵まれた生態系を作り維持する政治家たちで

あり、施政家(行政者)たちです。この農民たちの自主性こそ、真の農村復興の基であり、優れて自由で、平和で、幸せな「仁ある社会の実現」を可能にするものです。もうこの村は貧村ではありません。この世でもっとも豊かな理想的な地域社会・コミュニティです。此処には、仁ある村人たちが自主的に運営することを奨励する善政が敷かれているのです。政治がいいのです。それを農民たちに教え、諭し、育て、共に「仁ある村」を目指す、優れた施政家としての報徳先生の偉大さがここに 있습니다。**農村こそ、「仁者の共同体」**です。

善意の人 この「仁者の共同体」を思いつき、それを努力して実行に移し、衰村を復旧し繁栄させて、多くの農民の安泰に導いた功績を知るにつけ、そんな金次郎を尊敬し誉め讃えざるを得ません。父を失い、家財や土地や財産も失い、親類からの助けも得ず、家を再興し、農村を復興させ、財産も築き、他人にお金を貸すまでになったのも、金次郎たった一人の努力の賜物です。言ってみれば、独立独歩の人です。だれの助けも得ず、自身で考え、自分で判断し、自らが実行に移した努力の巨人でした。そうであるならば、金次郎は、当然、他人にも自己努力や自己責任を強引に主張して、怠惰な農民を軽蔑し、援助もせず、面倒もみない、孤立孤高の独善的な尊大な人物になっていたことでしょう。でも、違います。困っている人には無利子でお金を貸し、一家の面倒までみて、働かない者たちを悔悛させ、仕事も与え、農具なども買ってやり、とことん援助をしました。これは、一体、同じ人間として、どう考えたらいいのでしょうか？ なにが、報徳先生をそうさせたのでしょうか？ 「四書五経」のおかげでしょうか？ でも、漢籍を読んだ若者や君主やお役人はたくさんいます。その中から一人の金次郎も生まれていません。結局、よく分かりません。

「仁」にとっても「智」は必要

危うきかな「仁」 報徳先生の人柄や言動によって、「仁」が如何に大事であり大切であるかは分かりました。でも「仁」は、それだけでは極めて危ないものです。「仁」はよく悪にも利用されます。「仁」を正しく施すには必ずそれを正しく生かす「智」が必要です。「仁と智」については、役人になった二宮尊徳先生に次のような話があります —

慰勞を断る 尊徳先生、東海道より江都に出(い)で道程五十里数日にして野州芳賀郡櫻町に到着せり。于時(とき)に文政五午年[1822]なり。始めて至るの日、物井邑を去ること一里余にして谷田貝駅あり。里正某なるもの両三輩同駅に迎へ地に跪(ひざまづ)いて声を柔げ色を悦ばしくし、先生に謂て曰く、「君、小田原侯より委任の命を受け玉ひ弊邑の民を安撫せんとして遙かに此の地に来たり玉ふと聞き、邑民の悦び嬰兒の父母に見ゆるが如し。因て、某等、昔日(さきのひ)より此に出て君を待つこと久し。遠路の行歩、其の勞疲察す可し。爾来(じらい)、只、願ふ所は慈愛を蒙(こうむ)らん而已。今、聊(いささ)か其の勞を慰せんが為に少しく酒肴(さけさかな)を設けたり」と云。先生欣然として曰く、「汝等の厚意謝するに余りあり。君命、黙止(もだ)し難く不肖を顧みず此の地に臨めり。早く櫻町に到んとするの心而已にして途中の遅々を憂ふ、汝、努(ろう)すること勿(なか)れ」と、直に谷田貝(やたがい)を過て櫻町に到る。

遠路遙々(はるばる)、貧村を救いに故郷から家族共々やってきた尊徳先生一家を、その村を担当する里正たち三人が数日前から手前の村までわざわざ迎えに来ていたのです。尊徳先生の来村を感謝し、酒肴で歓待して、まずここでその勞をねぎらわんとする礼あり、「仁」ある態度です。それを、尊徳先生はあっさりと断ってそのまま旅をつづけました。まあ、なんてことでしょう。人の「仁」ある好意を無下に断るなんて、なんと「仁」のない行為でしょうか。先生のこのあまりに素(そ)っ気ない理不尽な応対に対して、それを「仁」なき業に思った人がいました。

佞奸を見抜く

或人、問いて曰く — 「彼の里正、遙かに迎えて子の努を慰せり。懇志至れりといふべし。然るに、子の彼を遇するに鹿(そ: 荒い・大雑把)なるは何ぞや」。

先生曰わく — 「凡(およ)そ、佞(ねい)を以て先んずるものは必ず奸人(かんじん)なり。實直・清潔のものは呼ぶといへどもたやすく来たらず。彼等は上を欺き下を貪(むさぼ)り私曲を逞(たくま)しくする所の奸人なり。予の到るを聞き其の罪の顕れんことを恐れ、表に實意を飾りて人を欺き、裏に私意を働んと巧みなり。君命を受け、此の土に来る者数人、皆、彼等の佞奸(ねいかん)に欺かれ、之を第一の善人と恩ひ識るの日より萬事之と共に謀(はか)れり。是の故に事は益々破れ、善人は之を怨み、悪人は私曲(しきよく・公正でないこと)を専らにす。何を以て衰廃を興すことを得んや。予は彼の表飾(ひょうしょく)を取らずして彼の腹心を察せり。敢えて彼を退けるにもあらず。又彼の術中に陥らず、**善惡を明弁して善を挙げ、不能を憐む** の政を布(しか)んとす」と。

或人、大いに先生の明鏡を感じぬ。

まさに、報徳先生は、「善を挙げ、不能を憐れむ」、真の善の人でした。「仁」と「不仁」を辨(わきま)えるには、まず、佞奸の行為を辨(わきま)える「智」が必要です。敵は身方にあります。各々方(おのおのがた)、御油断めさるな。

【2025/04/01 都築正道】

「負薪読書像」(ふしんどくしょざう: たきぎを背負って本を読む肖像)は、「本を読みながら歩くと交通事故に遭うので止めましょう」ということで、金次郎も座って読むことになりました。また、2010年代に入って歩きスマホの危険性が大きな社会問題になりました。この問題を受けて「いまいち一円会」が2016年に日光市立南原小学校に寄贈した石像は立像ではなく座像となりました。全く馬鹿げた話です。東京の上野公園もペット入園禁止となつて、西郷さんの銅像には犬はいず、西郷さんの左手には犬の首輪だけが残っています。(うそ)

